

歌の生成と生態——フィールドへ

猪股ときわ

単なる号泣でも、個人的なつぶやきでもない。一定の音楽的形式をもった泣く行為（カディナティ）と、一定の形式にそった言葉掛け（クイガケ）という、複数の声の様式が交錯するただなか、普段は人前ではうたわれないという一人の近親者が歌い手に成る。一方、歌の音楽的な様式は葬儀のみならず、野良仕事、遊びという人の生活の局面ごとを横断していたが、うたい手たちはゆるやかな区分感覚をもっている。こうして酒井正子氏によって再現された、歌声の生成の場も、流動するジャンル生成の様態も、古代の葬送歌謡や万葉挽歌との関係、万葉の恋歌や旅歌・挽歌との関係、古代歌謡の漢字表記化と「琴歌譜」……へと連想を誘う刺激的なものだった。

しかし私たちは民俗音楽研究の酒井氏の報告を、興味関心に従って単純に古代文学研究にスライドさせるというところにはもはや立ち得ない。沖繩の他の地域との歌の交渉がどうなっているか。親族中心・歌中心の「別れ」といっても、仏教者や民間宗教者の関与は歴史的に皆無であったのか。音楽面でのジャンルの横断と歌詞の関係はどうなっているのか。当日こうした質疑が出たのは、第一には与那国の事例を与那国の問題として徹底的に知りたい、という姿勢からであろう。ただし、それだけではあるまい。

シンポジウムの企画意図にそって、酒井氏は「別れ」の場面をうたい手の側から、歌が生成する瞬間に焦点化して再構成してくださった。それが「生成と生態」への回答のひとつであるとして、では地域的・社会的な広がりや歴史的な諸関係を「生成」「生態」という切り口で語り得るのか。歌の声（音楽性）と歌の言葉との関係をどのように語り得るのか。と、古代の歌であれ、与那国の歌であれ、その「生成と生態」を語る方法じたいが、議論されようとしたのだと思う。古代文学研究者もフィールド研究においては酒井氏と同じ土俵に立つ。とすれば、その土俵はどこに設定できるのだろうか。

岡部隆志氏は「歌の掛け合いを持続させるもの」を、二五分しか持続しなかった歌垣の例外的事例の、歌詞の面から考えていた。あるべき歌垣の形を想定してしまうのではなく、歌が生成する一つ一つの場に寄り添おうとするのである。中国少数民族の白族、小石宝山観音会での歌垣。雨宿りした観音廟のひさしの下、午前四時の真つ暗な中。三人の女たちを男たちがとりかこみ、「触ったり肩を抱いたりしている。女達は、その場で身を縮めているという様子」。それでも一組の男女の間に歌の掛け合いが始まる。が、掛け合いはたった二五分で終了。なぜ歌は持続しなかったのか、持続できなかった理由にこそ、歌を

持続させるものを考える手がかりがあるのではないか、と岡部氏は問う。

その折の歌詞を見ると、他の場合に比べて互いにほめあう挨拶の部分が短く、花などの植物を使った遠回りの表現が少なく、直接的な言葉で歌が展開している。歌詞の中に、ほめる、たとえる、あえて遠回りするといった表現と、名を聞く、年を聞く、家を聞くといった「覚めた要素」との落差がない。落差のないことが、今回の掛け合いをすぐに終わらせてしまったのではないかという。

暗闇の中、身体的な至近さを強いられた状態で、まず歌を発したのは女であった。彼女は、圧倒的に男の数が多く、無法地帯のようなこの場に、言葉の形・歌の形を介入させようとしたのか。歌は、この場面の女にとって、相手の男から距離をとる手立てとしてあるように思えた。「牡丹の花」を持ち出す歌詞に対して、男側の答歌は「恋人がいなければあなたと話をしたい。」と、たしかに直語的で、比喩の応報がなり立っていないように見えた。比喩の役割、ほめることの機能が議論でも話題になっていた。だがより印象深かったのは、現代日本語へ翻訳された歌詞を分析して、白族の歌垣の歌をとらえることができるのか、白族の掛け合い歌の表現構造はどうなっているのかといった、言葉の分析の根本への関心である。

古代文学の研究をする者が一方で中国少数民族の歌垣の調査をする。それは、一つには沖縄・南島古謡やその言語文化の諸相から古代を考える発生論に対して、さらに東アジア文化全域までを視野に入れなければ文学の発生論も古代社会像も構築で

きないとするところであろう。岡部氏が共同研究で出されている中国少数民族の歌垣調査の報告書は、そうした立場を鮮明に打ち出している。むしろ白族の歌垣に行きさえすれば、古代さながらの歌の掛け合いに立ち会えるわけではない。同一の歌垣文化圏という大きな視野の中に立ったとき、現代と古代という歴史的な差異も、地域的な相違も明らかになる。言語文化の相違にも直面する。

歴史的な背景や現代的なコンテクストをふくめた中国少数民族の歌の現場を直視する。そのための方法そのものが、古代文学研究を照射するのではないか。白族の言葉を今学びつつあるという岡部氏が「翻訳」に関する質疑に対して、「古代文学の研究でも、常に現代日本語に翻訳して歌の言葉を考えざるを得ないではないか、それと同じだ」と答えるとき、まさにここから、古代文学研究と白族の歌垣の研究がともに始まる。

古代文学研究者はなぜ、フィールド調査の現在と対話しようとし、あるいは自らにフィールド調査を課すのだろうか。古代の文献世界が、あまりにも「生成と生態」から遠いからであろうか。いや、活字によって古代の言語に触れるとき、その遠さすらも、見失うのは容易い。フィールド調査に出かけ、現場をつかむための身のこなしや方法を模索すること。フィールド調査研究と文献研究の共通の土俵を見極めようとする。そのいずれにしろ、今回のシンポジウムが文献資料やテキストをも含む広い意味でのフィールド（場）への接近の、新たな第一歩であれば、と願う。